



## 枝廣淳子の 賢者に備えあり 「働き方改革」は 何のためにするのか

最近「働き方改革」に関する記事をよく目にします。安倍晋三首相は、八月三日に行った内閣改造の目玉として「働き方改革」を担う特命担当相を新設しました。かなりの力の入れ方ですね！

財務省と厚生労働省による働き方改革の原案は、「残業時間上限を設けるなどして長時間勤務を抑制するとともに、最低賃金の20円超引き上げや雇用保険料の大幅な引き下げで働き手の所得を増やす。『年収130万円の壁』を超えられるよう、企業への助成金を増

ために、(今はそうなっていない)働き方を変えていくものではないでしょうか。

近年、優れた教育などで注目を集めているオランダでは、ワークシェアリングが浸透しているため多くの人が週休三日です。夕方に仕事が終わる、夜は家族でゆったりと時間を過ごしたり、地域のボランティア活動に携わるそうです。それでいて、経済が低調なわけではありません。家族がいつも一緒にいられる環境になり、保育園に通う子供は二割と聞いて日本との発想の違いを痛感しました。

本人の幸せのためではなく、「経済成長のためには労働者が必要だ。労働人口が減っていく日本では、女性や高齢者を活用しなくてはやっていけない！」と、女性の活躍推進を進め、「そのためには母親が働けるよう、子供を預けられる場所が必要」と、保育園の拡充に走り回る日本は、オランダとは真逆の方向に突っ走ろうとしています。「働きたいのに保育園が足りない」という人がたくさんいる現状は変えていかなくてはなりません。しかし、もう少し働き方のバリエーションがあれば……と思うのは私だけではないでしょう。

そもそも、国が「国民や社会の幸せのため」ではなく、「国の経済成長のため」に、働き方改革を進めようとしている日本の現状と構造も、変えていかなくてはなりません。

「自分は経済成長のために働いている」という人がどれほどいるのでしょうか。私たちが働くのは、それぞれが幸せな暮らしを送るた

めではないかと思うのです。

「経済成長を続けるために、労働者の働き方を変えよう」という発想ではなく、「人々の幸せのために働き方を変える」、そして「その結果として、経済が安定する」という考え方で、働き方改革を進めてほしいものです。

また、日本企業で働いているのは日本人だけではありません。かねてより「問題だ」と指摘されつつ、根本的な改善に至っていない外国人労働者の働き方(雇用)の改革はどうなっているのでしょうか。

昨年、群馬県太田市で自動車の製造業に關わっている約百二十人の外国人労働者の調査を行ったロイターが、ショッキングな報告を出しました。そこはアジアやアフリカからの難民申請者や安い外国人労働者によって支えられているのですが、労働者の中には時給にして約四百九円しか支払われていなかった人が、数十人いるというのです。また、人手不足を背景に、安価な労働力として求められる外国人技能実習生が増えており、二〇一五年末時点で二十万人弱いるそうです。

厚生省によると、一五年に三千六百九十五事業所で業務の安全配慮が不十分といった労働安全衛生法違反、時間外労働などへの割増賃金の不払いなどの法令違反があったとのこと。日本の経済を支えてくれている外国人労働者の働き方の改革も併せて進めてほしいと強く願います。

(東京都大学教授／幸せ経済社会研究所所長)